

情報化によって芸術はどう変化したか？

一 美学・芸術学から見た場合

芸術がどう変化したか、を考えるために、
芸術を見る観点をいくつか決めておきましょう。

芸術を見る視点

時間 Time

空間 Space

身体 Body

公共 Public

生成 Generative

「広場の芸術」を例に、この視点から変化を理解していきましょう。



[Fig.1]
1981



[Fig.2]
2003



[Fig.3]
2017

[1] <https://www.tate.org.uk/art/artists/richard-serra-1923/lost-art-richard-serra> 2019/10/4

[2] http://www.lozano-hemmer.com/frequency_and_volume.php
2019/10/4

[3] https://daichinoseiza.info/activity_report/
2019/10/4

「工業社会の段階ではフィジカルなものを—それは技術であり、科学技術の成果であっていいわけですが—それをエクスポーズ(展示)するエクスポジションがひとつの文明史的な意味をもっていた。しかし、そうした形式は**情報化社会に進みつつある現在**、あまり意味がない。ハードウェアを展示したり、またそれを見に行くということよりも、むしろ**ソフトウェア的な環境**を作ることに意味があるのではないか。むしろ人間と人間との直接的なコミュニケーションとか、人間のもっているノン・フィジカルな伝統とか、知恵とか、文化とか、そういったものを持ち寄ってお互いに集まろう。それはエクスポジションというよりもフェスティバルである。**お祭り**である。そういう考え方がわりと早い時期に出てきまして、お祭り広場という考え方もそういう考えを受けて会場の真中に最初の段階から配置され、それは最後まで動かなかったのです。」

(丹下健三『新建築』「特集EXPO'70」, 1970年5月号,

引用は菊池誠編(2005)『メディアとしての建築-ピラネージからEXPO'70まで』東京大学総合研究博物館, p.125より⁴)

Richard Serra, *Tilted Arc* (1981)



<https://www.tate.org.uk/art/artists/richard-serra-1923/lost-art-richard-serra> 2019/10/4

Rafael Lozano-Hemmer, *Frequency and Volume*, 2003



http://www.lozano-hemmer.com/frequency_and_volume.php

2019/10/11

「『フリークエンシー&ヴォリューム』は、訪れた人々が能動的に身体を動かすことで、不可視の都市のインフラとしての周波数—航空機の管制情報、短波、携帯電話、タクシー無線など、50kHz-1.5GHzの帯域—をリアルタイムにスキャンし、音として放っていく作品である。人々は空間内を前後に動くことで音量を、左右に動くことで周波数を調節し、音を変化させることができる。身体が一種のアンテナになり、空間がヴァーチャルなラジオになったかのような、これまでにない体験。影と自由に戯れることで人々は意識を解放し、また居合わせた人同士が関係し、即興的な音のセッションが生まれていく。この作品はまた、公共の都市空間に偏在する情報をリソースに、各地で異なる電波環境というインフラを扱うことで、文化・社会・政治的差異を顕在化させる実践的批評ともなっている。」



https://daichinoseiza.info/activity_report/ 2019/10/4

リレーショナル・アート

「フランスのキュレーター、ニコラ・ブリオー-Nicholas Burriaudの著書『関係性の美学 Esthetique relationelle/Relational Aesthetics』(1988年)の主張に基づくものである。ここでブリオーは、絵画や彫刻を作るのではなく、人々が**交流する場**を作る、つまり人々の**関係性を形づくる**ことが、これからのアートのあり方だと訴えた。

その典型的な例としてよく紹介されるのが、タイのアーティスト、リクリット・ティラヴァーニャの作品だ。ティラヴァーニャはニューヨークの個展「無題(自由/無料)」(1992年)で、ギャラリー内に調理器具を持ち込み、訪れた人にタイカレーをふるまった。ギャラリーは互いに知らない人々が**一時的に小さなコミュニティを作って交流する場**となった。」